詫間中学校学校通信　輝　跡　～ 仲間を信じ輝く道へ ～

浦島伝説

令和7年11月14日
第 26 号

80年前の詫間町のエピソード

今週月曜日(11 月 10 日)の朝、FM 香川(ラジオ)で詫間町に関するエピソードが放送されたのでそれを紹介します。

80年前の昭和 20 年(1945 年)11 月は終戦して3か月くらいのころです。当時、日本中が敗戦に打ちひしがれていました。

かつて詫間町には「詫間海軍航空隊」がありました。今の高等専門学校のあたりです。ここでは主に水上機の実機練習航空部隊として訓練をしていましたが、戦況が苦しくなると、特別攻撃作戦も行うようになりました。詫間町誌には、特攻として4度の出撃が記録されています。

進駐軍が二式大型飛行(二式大艇)に興味を示し、9月末に詫間基地に残存する二式大艇を飛行可能な状態に回復するよう命じます。終戦時、二式大艇はわずか 11 機のみ。終戦から数日のうちに8機が処分や事故で失われ、詫間基地が保有する3機だけになっていました。部隊は解散し、整備兵は残っていません。急遽呼び戻され3機の内、最も状態の良かった 31 号機(1943 年 3 月製と推定)をベースに、残り2機の部品を利用して修復し、同年 10 月末に完了しました。

幅は大和とほぼ同じ大きさの二式大艇

そして試験飛行が行われたのが、11 月 10 日。このとき、詫間町内の多くの人が空を見上げ、開戦時には度々目撃し、聞こえたエンジン音。敵機ではなく久々に見た日の丸をつけた飛行機に**詫間町内の多くの人が勇気づけられた**という話が残っています。

31 号機は、日辻常雄(ひつじつねお)少佐の操縦で横浜まで運ばれたとき、同乗していた米海軍のシルバー中尉は、二式大艇の卓越した性能に驚嘆してこう述べたと言われています。

「日本は戦争には負けたが、飛行艇では世界に勝った」

米側に引き渡された 31 号機は、空母で米本土に移送され、同年 12 月に米東岸のノーフォーク海軍基地に到着。米軍によって徹底的に調査されました。翌年 5 月に米国内でテスト飛行を行い、ここでも多くの米軍関係者や技術者を驚かせたと言われています。その後、この機は同基地の倉庫で保管されていました。1959 年、二式大艇の生みの親、菊原技師がこの基地を訪れ、日本への変換交渉を行いましたが、実現には至りませんでした。

日本財団がそのことを知り、交渉の末ようやく帰国することになりました。船の科学館が引き取りを表明し、1979 年 11 月、31 号機は 34 年ぶりに日本に帰国することになりました 1980 年 7 月から、船の科学館に展示されていましたが、2004 年 4 月末に鹿児島県の鹿屋航空基地史料館に移設され、現在に至っています。**世界に現存する唯一の二式大艇は詫間町で活躍していた機体です。**